

16世紀「価格革命」論の検証

The Sixteenth-century 'Price Revolution' Reconsidered

平山 健二郎*

That prices rose significantly in sixteenth-century Europe is widely known as the 'Price Revolution' which seems to have been popularized by the writings of J.M. Keynes. The concept was put forth by Wiebe and Hamilton who documented the enormous volume of precious metals flowing into Europe from Spanish colonies in the New World. The Wiebe and Hamilton thesis is a simple application of the Quantity Theory of Money which explains the higher price level only in terms of the larger money supply. However, a substantial body of literature exists which focuses on non-monetary, i.e. real, factors contributing to price rises in sixteenth-century Europe.

Kenjiro Hirayama

JEL : N13, E31

キーワード：価格革命、貨幣数量説、インフレ

Key words : Price Revolution, Quantity Theory of Money, Inflation

1 はじめに

16世紀は「大航海時代」と言われ、ポルトガル・スペインを中心にヨーロッパ諸国は、その優れた航海技術を駆使してインド洋、大西洋、そして太平洋へと進出した。それがヨーロッパに及ぼした経済的な影響も広範囲にわたるが、

* 本稿作成に当たっては、関西学院大学経済学部竹本洋教授、篠原久教授、井上琢智教授にコメントを頂戴し、間違いを指摘して頂いた。大阪大学文学研究科・川北稔教授（当時、現名誉教授）には文献に関して多くを教えて頂いた。また大阪大学経済学研究科・筒井義郎教授からも内容に関する多くの有益なコメントを頂いた。以上、記して感謝致します。なお、残った誤りはすべて筆者の責に帰すものです。

金融面での刮目すべき出来事は、中南米のスペイン植民地（「新世界」）から持ち込まれた大量の金銀がスペインを經由して各国にも流入し、価格を上昇せしめたことであろう。早くも 1556 年にはスペインの価格上昇が金銀の流入に起因することをスペイン・サラマンカ学派のデ・ナバロ (Azpilcueta de Navarro) が記述している。¹⁾ その二百数十年後、かのアダム・スミスも、「穀物で計った銀の価値が（1570 年から 1640 年の間に）下がったことの唯一の原因はアメリカで豊富な鉱山が発見されたことである。誰もがこのように説明しているし、この事実と原因については論争が起きたことは、かつて一度となかった」²⁾ と述べており、新世界からの金銀の供給が価格上昇をもたらしたという「事実」は 18 世紀には定説として定着した模様である。

その後、ドイツのヴィーベ³⁾ やアメリカのハミルトン (Hamilton, 1928, 1934) 等の研究により、この価格上昇は「価格革命」と名づけられた。とくにハミルトンはスペインのセビリアにあるインド総古文書館 (Archivo General de Indias) に残された記録を丹念に調べ、夫人とともに延べ 30,750 時間という膨大な作業を経て、セビリアへの金銀流入量や、アンダルシア地方（スペイン南部の地方）の個別商品価格を調べた上で価格指数を推計し、「価格革命」を実証したことで有名である。ケインズもハミルトンの研究をもとに *A Treatise on Money* において、「ポトシ鉱山などの発見により、1545 年から 1560 年の間には採掘量が飛躍的に伸び ... アンダルシアでは 1519 年から 80 年ほどにわたって、ほぼ間断なく激しい価格上昇に見舞われた」⁴⁾ と述べ、貨幣数量説に基づいた説明を与えている。

このように 16 世紀の「価格革命」は貨幣数量説が成り立つ古典的な事例と思われるが、その後の経済史研究の発展により、かならずしもそれほど単純に「新世界からの金銀の流入が価格の上昇をもたらした」のではないことが分

1) Grice-Hutchison (1978), p. 104.

2) Smith (1776), Vol. 1, p. 191.

3) G. Wiebe, *Zur Geschichte der Preisrevolution des XVI. und XVII. Jahrhunderts*, 1895 が主要文献であるが、英訳がなく、ドイツ語が読めない筆者は残念ながらこれを参考にすることはできなかった。

4) Keynes (1930), Vol. 2, pp. 152-153.

かってきた。本稿はまず16世紀の「価格革命」がどのようなものであったのかをハミルトンの研究に基づいて提示し、ついでその後の研究により判明してきたことを紹介することによって、貨幣数量説が妥当したのか否かを検討することにしたい。

2 スペインへの「新世界」からの金銀の流入と価格水準

ヨーロッパではすでに15世紀前半にポルトガル王・エンリケ（航海王）によってアフリカ西岸地域への航海が始められていたが⁵⁾、1492年のコロンブスのアメリカ大陸発見は大西洋への進出を促し、16世紀前半にはピサロによるインカ帝国（メキシコ）、コルテスによるアステカ王国（ペルー）の征服などが行われて、スペインによる中南米植民地の経営が本格化していった。かの地では金山・銀山が豊富であったため、採鉱された貴金属はスペインのセビリアに運ばれた。当時の重商主義的な発想から、金銀は国力の源泉であるとして、公的・私的を問わずすべての金銀を積んだ船はガダルキビル川を遡上してセビリアに搬入することが法令で決められていたため⁶⁾、セビリアの通商院（Casa de la Contratación）にその輸入量が記録され、現在はセビリアのインド総古文書館にそれらの会計文書が保管されている。もちろんセビリアに荷揚げされない密輸もあったであろうが、この性格上その量の把握は不可能である。セビリアに搬入された金銀の5分の1はスペイン王への税金（quint、五分の一税）として払われたが、残りは植民地で金銀を採鉱した人達のものであり、彼らが必要な食料・衣料・武器などの物資の購入に使われたようである。その購入記録がまた商品価格の貴重な統計となり、ハミルトンはアーモンド・ベーコン・豆・牛肉・ワイン・獣脂・オリーブ油等の主として食料品24品目の個別価格を1503年から1660年の期間について、数年ごとにデータを收拾し、価格指数の推計を行っている。

まず、金銀の輸入量の推計をみてみよう。当時の貨幣単位あたりの金と銀の

5) Cipolla (1993), pp. 207-208.

6) Hamilton (1928), p. 3.

表 1: 10 年ごとのスペインへの金銀輸入量 (グラム)

期間	銀	金
1503-1510		4,695,180
1511-1520		9,153,220
1521-1530	148,739	4,889,050
1531-1540	86,193,876	14,466,360
1541-1550	177,573,164	24,957,130
1551-1560	303,121,174	42,620,080
1561-1570	942,858,792	11,530,940
1571-1580	1,118,591,954	9,429,140
1581-1590	2,103,027,689	12,101,650
1591-1600	2,707,626,528	19,451,420
1601-1610	2,213,631,245	11,764,090
1611-1620	2,192,255,993	8,855,940
1621-1630	2,145,339,043	3,889,760
1631-1640	1,396,759,594	1,240,400
1641-1650	1,056,430,966	1,549,390
1651-1660	443,256,546	469,430
全期間トータル	16,886,815,303	181,063,180

データ出所：Hamilton (1934), p. 42. 金銀とも純度 100%換算。

含有量は改鑄・悪鑄によって変化しているので、それを考慮に入れてハミルトンが重量換算をおこない、1503～1660 年の期間の 10 年ごとの金銀輸入量を表 1 のように推計している。16 世紀初めは金の輸入だけであるが、1520 年代に銀の輸入が始まり、16 世紀半ばからはメキシコ・ペルーからの銀輸入が拡大し、さらに 1571 年にはアマルガム精錬がポトシ銀山（ペルー、現在はボリビア）で採用されて、銀の生産量がさらに伸びた。ピークは 10 年間に 2708 トンを輸入した 1590 年代の 10 年間である。その頃の年間平均輸入額は、スペイン全土の労働者を 21 日間雇用できる程の金額に相当するとハミルトンは推定している。⁷⁾ 当時は週休 1 日として 1 年間に 300 日程度働くとすれば、年間所得の 15 分の 1 程にあたる金額であるので、相当の規模に上がることが理解できる。158 年間の総計では銀が 16,887 トン、金が 181 トンとなっている。16 世紀半ばの金銀の交換比率は約 11:1 程度であるから⁸⁾、銀の量が圧倒的に多

7) Hamilton (1934), p. 35.

8) Braudel and Spooner (1967), p. 459, Fig. 5.

い。また1650年代には輸入量はかなり減退している。

この金銀輸入量の大きさが当時の貨幣ストックに比べてどれ程になるのか知りたいのであるが、残念ながらスペインに関しては貨幣ストックの大きさや貨幣の鑄造高の信頼できるデータが得られない。⁹⁾そこでデータがある程度利用できるイギリスの通貨で比較してみよう。¹⁰⁾イギリスでは16世紀半ばに悪鑄が繰り返されたが、1560年にエリザベス1世（在位1558～1603年）が改鑄し、1トロイオンス（=31.1グラム）あたり60ペンスという銀貨の重量が決められ、その後1601年に62ペンスとなってからは1816年までこの率が保たれたので¹¹⁾、とりあえず1トロイオンスあたり60ペンス（=5シリング=0.25ポンド）と考えて、16887トンの重さの銀をポンドに換算した。¹²⁾また金は17世紀に入って何度か悪鑄されたが、これも1590年のクラウン貨の1トロイオンスあたり60シリング（=3ポンド）という割合¹³⁾を使って、スペインに1503年から1660年の間に輸入された金の重量を英ポンド建てに換算した。¹⁴⁾それら二つの合計は約1億5300万ポンドに達し、158で割って、年平均にすれば約97万ポンドになる。ゴールドスミスによると1603年のイギリスの通貨流通高は350万ポンドであったし¹⁵⁾、川北によると1558年から1659年の間、イギリスの年平均通貨鑄造高が26万ポンドであったので（表3、219ページ）この年平均97万ポンドという金額はやはり大きなものである。スペインの金

9) ただし、金銀輸入量のすべてが造幣局（Mint）でコインにされた訳でもない。また、セビリヤに限らず、当時のスペイン各地の造幣局のデータが不十分で、コインの生産量の正確な把握は難しい。さらに仮に造幣局の鑄造量が把握できたとしても、溶解・盗削・密輸出などによって国内流通量が減少するケースも多くあり、貨幣ストックの正確な把握はいずれにしても困難である。

10) 17世紀初頭のイギリスの人口は約411万（Wrigley and Schofield（1981）, Table A3.1, p. 528）、スペインはカスティリアとアラゴンの合計で800万程度（Ubieto, Reglá, Jover and Seco（1972）, p. 271）と推定されているので、人口で見ればイギリスはスペインの約半分の規模であった。

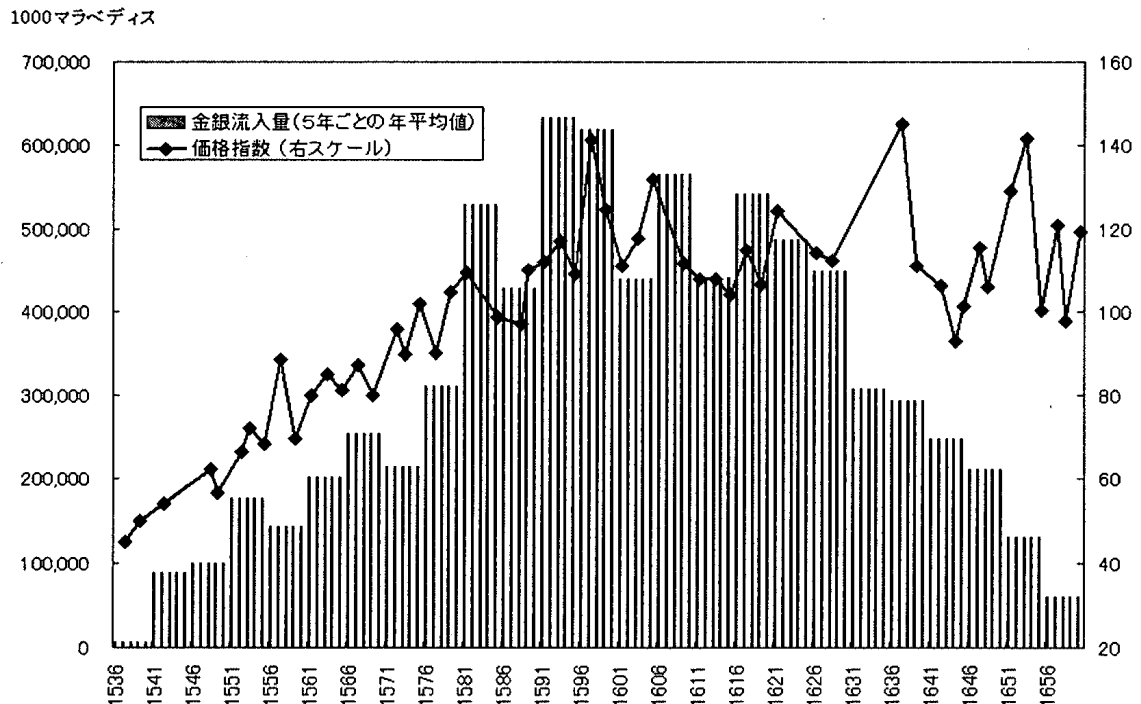
11) Feavearyear（1931）, Appendix I, p. 346. 当時のイギリスでは12ペンスが1シリング、20シリングで1ポンドであった。ただし5年間の周回準備を経て1971年2月にイギリスの貨幣制度は十進法に移行し、1ポンド100ペンスとなった。

12) $16,886,815,303 \div 31.1 \times 0.25$

13) *Ibid.*, Appendix II, p. 347.

14) $181,063,180 \div 31.1 \times 3$

15) Goldsmith（1987）, p. 180.



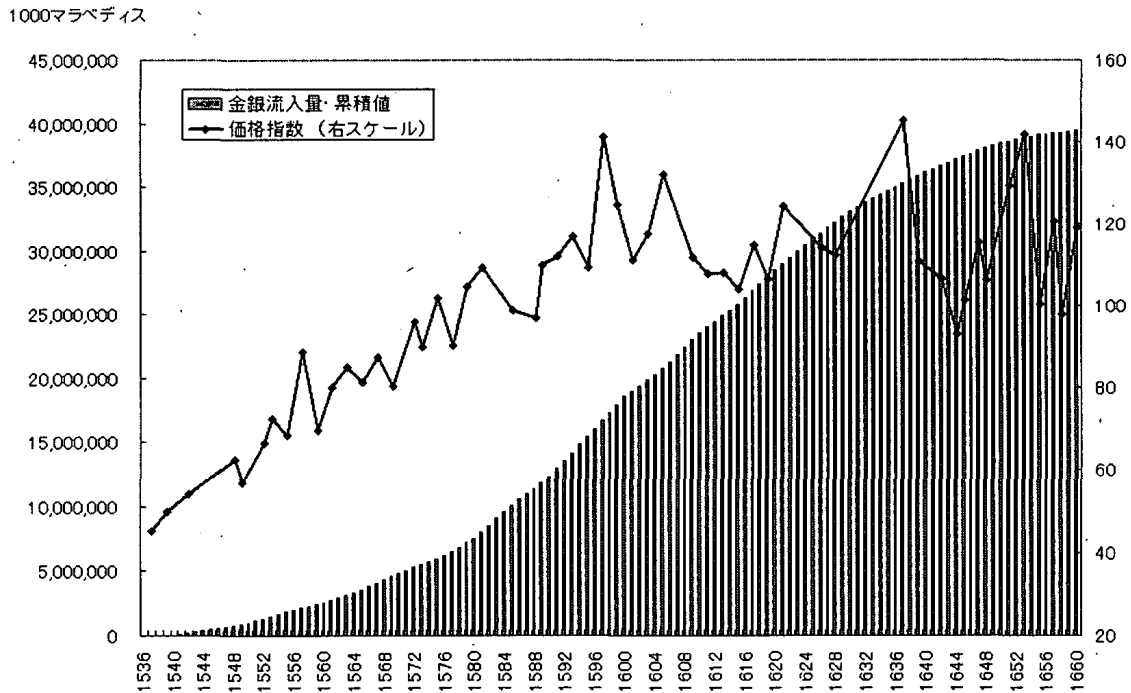
データ出所：Hamilton (1928), pp. 6, 26. なお、450 マラベディスは銀 42.29 グラムに相当。

図 1: スペインへの金銀の流入量と価格指数

銀は輸入やフェリペ2世（在位 1556～98 年）の戦争（レパントの海戦やオランダ独立戦争など）の出費のため、ヨーロッパ各地に広まり、1577 年にはパリのスペイン大使館からの同王あての報告書に「この王国で目にする通貨はほとんどがリアルやエスクードなどのスペイン通貨であり、さらに毎日のようにスペインの貨幣をフランスのコインに鋳直している」¹⁶⁾と記されている程である。

このように大量の金銀がスペイン及び他のヨーロッパ諸国に流入したことが判明したが、そのうちのどれだけがスペインの貨幣として鋳造されたのかは先述の通り、信頼できるデータが得られていない。しかしかなりの部分がまづはスペインの貨幣として流通したであろう。そしてこの膨張した貨幣量が物価を押し上げたというのがハミルトン・テーゼなのである。さて、Hamilton (1928) の価格指数の推計は 1503 年から始まっているが、メキシコ・ペルーの銀山の発見前は輸入量が非常に少ないので、1536 年以降、1660 年までについて金銀輸入量と価格指数をプロットしたのが図 1 である。データは毎年につい

16) Hamilton (1934), p. 46, n. 2.



データ出所： 図 1 に同じ

図 2: スペインへの金銀の流入量の累積和と価格指数

であるのではなく、金銀輸入量は5年ごとの年平均値で、価格指数は2ないし5年など不連続にしか推計されていない。さて、この図によると金銀輸入量は16世紀中は増加傾向にあり、1590年代の10年間でピークで、その後17世紀に入ると一転して減少傾向に転じている。価格指数は16世紀中は上昇傾向にあり、17世紀にはいると大きな循環変動はあるものの、上昇も下降もしない状況にある。ハミルトンはこの図から、16世紀の価格上昇は金銀の流入量と見事な相関を見せており、ほかにも人口増などの原因は考えられるものの、新世界からの金銀の流入が基本的な原因であると結論し、「価格革命」の根拠を示したのであった。

この図を一見して分かることは、金銀輸入量と価格の正相関は16世紀中のことであり、17世紀に入ると二つの動きは相関を失ってしまう。しかし、この二つの変数のとりかたは正しくない。金銀輸入量はフローであって、貨幣のストックではない。そこで金銀の輸入量の累積和を計算し、ストックのおおざっぱな推計値と考えてプロットしたのが図2である。もちろん図1から予想で

きたことだが、17 世紀に入っても金銀は引き続き大量にスペインに流入していたのに、価格の方は安定化傾向に入っている点が、貨幣数量説的には説明がつかない。全体としては金銀の大きな流入が価格上昇の主要な原因であるにしても、それだけでは説明がつかない動きが残ることが明らかであろう。以下でみるように、16 世紀の「価格革命」を貨幣量の増大だけに帰することに對する批判は 1950 年代以降、数多く提示されているのである。

3 金銀の欧州各国への流出と価格上昇

「新世界」からスペインに流入した金銀のうちどの程度が、どのような径路でヨーロッパ諸国に流れていったのかについて、「その全体のすがたはまだ不明である」¹⁷⁾ が、ブローデルが物語風に細かくその事例を描いている。神聖ローマ皇帝カール 5 世（在位 1519～1556 年、スペイン王としてはカルロス 1 世）やフェリペ 2 世が金貸しと締結した「アシエント契約」が史料として残っている。当初はフッガー家、ついでジェノヴァの銀行家と契約し、彼らが通貨の持ち出しを願い出て、その許可が下されている。¹⁸⁾ ブローデルによると、1580 年から 1626 年の間にセビリアに輸入された銀の総量は 11,304 トンであったが、カトリック王が新教勢力に対抗するためやトルコのオットマン帝国を攻撃するために使った「政治的」銀により、オランダへは 2,528 トン、イタリアには 828 トンが注ぎ込まれた。¹⁹⁾ その結果、イタリアでは貨幣の鑄造が盛んになった：

イタリア半島の...いかなる造幣局もフルに操業している。...1599 年から 1628 年まで、ナポリの造幣局では 1,300 万枚の硬貨が鑄造される...パレルモ、メッシーナ、あるいはジェノヴァでも同じである。貨幣は発行されるとすぐに流通し、特に 17 世紀ではたちまちのうち

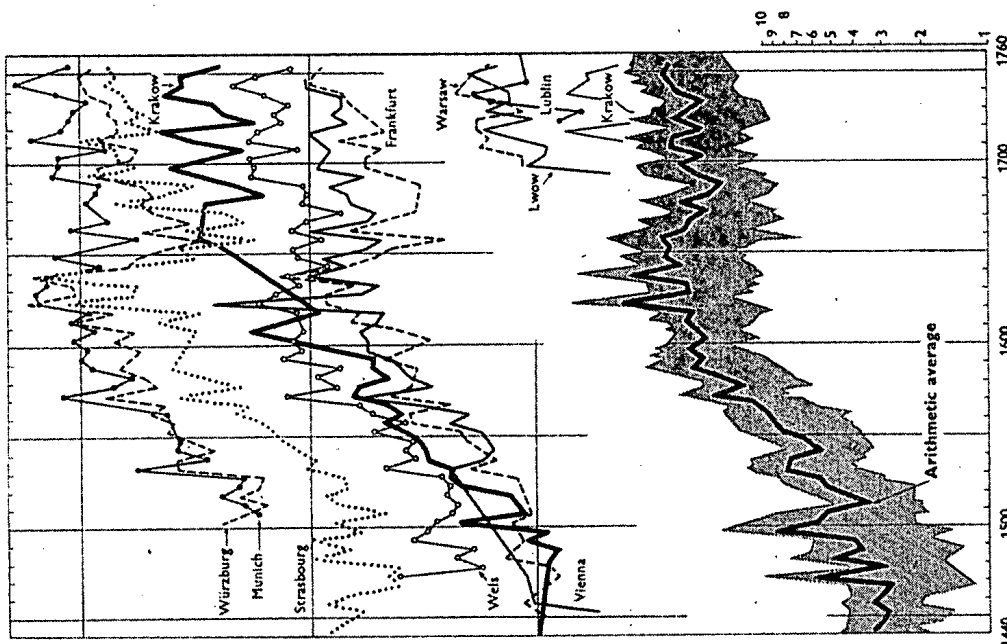
17) 竹岡 (1974), p. 9.

18) ブローデル (1992), pp. 215-216.

19) *Ibid.*, p. 211, 図 41.

475

MONEYS OF ACCOUNT



474

WHEAT PRICES IN

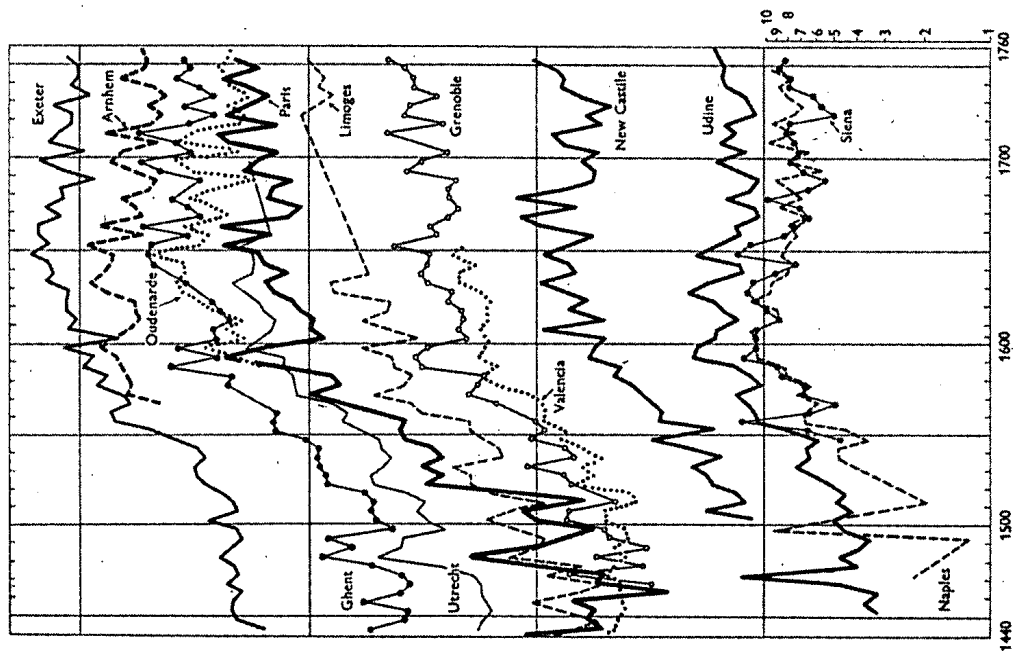


Fig. 21. Wheat prices in moneys of account: five-yearly averages. The boundary limits of the shaded area have been obtained by fitting graphically 50 series of wheat prices in Europe, of which 20 are given separately above.

データ出所：Braudel and Spooner (1967), pp. 474-475.

図 3: ヨーロッパ主要都市の小麦価格

に発行地から離れていく。ヴェネツィアでは「造幣局」は絶えず鑄造している。...平均すれば、毎年金貨 100 万、銀貨 100 万である。²⁰⁾

フランスのパリでもスペインの貨幣が大量に流通していたことはすでに見たとおりである。それらは単に貿易の支払のみならず、フェリペ 2 世の戦争の費用としても膨大な支払が海外になされている。パーカーによれば、1552 年から 1559 年に対仏戦争でオランダに使った費用は年 2,000,000 ドゥカード、1590 年代にはフランドル軍の維持費が年 3,000,000 ドゥカードに上り、1574 年にはカスティリア王国の負債残高は 81,000,000 ドゥカードで国家年収の 15 倍にあたり、フェリペ 2 世は在位中 4 回もの破産を経験しているのである。²¹⁾

このようにスペインからヨーロッパの主要国に大量の金銀、とくに銀が移動していったのである。その結果、これらの国々では 1500 年から 1620 年の間に物価水準が 300 から 400% 上昇したと言われており²²⁾、そのゆえに「価格革命」と名づけられたのであろう。ただしチポラ達が指摘するように、120 年間で 400% の上昇は 5 倍という倍率であるが、複利計算で成長率を出すと²³⁾、年率 1.35% に過ぎず、これが「革命」的なインフレかということ、現代の尺度からはとてもそうは言い切れない。

たとえば小麦の価格についてヨーロッパ主要都市における価格が図 3 に描かれている。この図を一見して、主要都市での 16 世紀から 17 世紀前半にかけての小麦価格の上昇が大きく、しかも全体としては非常に似た動きをしていることに気づく。金銀の流入量が国の規模別に正比例していた訳でもないであろうから、逆にこれほど類似した価格の動きにはさらに別の原因が考えられるのではないか。また、ほとんどの都市では価格が上昇し始めるのは 16 世紀に入ってからすぐのことであり、金銀が大量に流入し始めた時期より相当早い。したがって 16 世紀の「価格革命」の原因を新世界からの金銀の流入だけに求める

20) *Ibid.*, pp. 243-244.

21) Parker (1998), pp. 87-88. なお、1 ドゥカードは銀約 5g にあたる。

22) Cipolla (1993), p. 215

23) $5^{1/120} = 1.013502...$

表 2: ストックホルム地域の価格 (貨幣単位表示・5 ないし 10 年平均)

	大麦	バター	鉄	煉瓦	石灰	塩*	塩†	布‡	胡椒	丁子	蝸
1460-1469	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100
1470-1479	102	94	107	—	—	—	90	—	93	—	95
1480-1489	106	—	113	108	118	—	—	—	—	—	91
1490-1499	147	89	96	80	120	105	97	95	136	—	106
1500-1509	128	97	100	—	—	106	105	—	267	—	101
1510-1519	—	136	112	—	—	156	147	—	—	—	119
1520-1524	—	323	—	—	—	524	280	—	—	—	284
1525-1529	452	213	173	206	200	293	192	125	367	467	235
1530-1539	304	316	218	—	173	247	211	161	384	568	196
1540-1549	498	505	290	206	245	178	218	184	367	457	149
1550-1559	863	617	418	277	336	233	236	194	427	425	226

*ブルグネフ湾産 †リュネベルク産 ‡オランダ・ナールデン産

データ出所：Hammarström (1957), p. 143.

ことには困難があると言えるだろう。

さて、先の図 3 は小麦の価格であったが、他の商品についてはどうだったのか。竹岡 (1974) の著作は副題に「価格革命の研究」とあるように 16～17 世紀のフランスの物価を研究したもので、パリの穀物価格以外にも、グルノーブルを中心としたドフィネ地方、ドウエ、トゥールーズ、オルレアンなどの都市における穀物価格 (場合によってはワインや工業品、賃金) を推計している。商品によってその率は異なるが、16 世紀はやはり物価上昇の時期であったことが確認される。²⁴⁾ハンマーシュトレームはスウェーデン・ストックホルム市地域の農産品・工業製品 11 種について、1460 年から 1559 年の間の価格を 10 年ごとに推計しており (ただし、1520 年代は 5 年ごと)、やはり 16 世紀に入ってから 60 年で 3 倍から 8 倍の価格上昇を報告している (表 2 ²⁵⁾)。商品間の比較では大麦やバターなどの農産物の価格上昇が他の工業製品 (鉄・煉瓦・石灰) などのそれよりも高いのが特徴である。これは次節で検討するように、

24) 竹岡 (1974)、第 6～10 章。

25) この表の価格は当時の貨幣の名目単位で表示したもの。物価史の研究においては貨幣単位で表現するのではなく、等価貴金属量で計ることが多かったようであるが、それは貴金属で計った相対価格であり、名目価格ではないので、やはりこの表のように貨幣単位で表すのが適当であろう。この点に関しては竹岡 (1974、第 5 章) を参照。

当時はヨーロッパ各国で人口が増加しており、人口増加による食料需要の高まりが関係しているかもしれない。さらに賃金は食料品価格に比して、上昇が遅れがあり、雇用者側にとっては有利な展開となったことが、産業の発展につながったとする意見も根強い。すなわち実質賃金が下落したため、産業資本側の利潤率が上昇するという「利潤インフレ」が発生し、それが資本主義の勃興につらなっていくという説である。²⁶⁾

以上のように 16 世紀は欧州各国で農産物価格で見ると、大きな価格上昇が起きた時期であり、その年率は必ずしも高くないものの、その前後の時代に比べて、価格上昇トレンドは際立っており、「価格革命」という名称がつけられたのであった。

4 「価格革命」像の転換

本稿冒頭に引用したようにケインズがハミルトンの「価格革命」論を紹介したことにより、これが経済学界に定説として定着した感があるのだが、川北によれば、「... 従来の価格革命像... は、近年に至って余すところなく批判され、本来の姿を失いつつある」²⁷⁾のが 1950 年代以降の実態のごとくである。「新世界」からの金銀の大量の流入により価格が上昇した、というのは貨幣数量説的には非常に納得しやすい説明ではある。しかし、前節で指摘したように、ヨーロッパ諸国で価格が上昇を始めたのは 16 世紀初頭からであり、金銀の流入量の増加時期と一致しない。したがって詳細に検討していくと、貨幣数量説的な解釈だけでは説明できない側面が多々あるのである。

ハンマーシュトレームによれば、ハミルトンは価格の上昇を貨幣数量説のあまりにも機械的な適用だけで説明しようとしている。貨幣数量説の定式化 $MV = PT$ は恒等関係であって、「自明の理」(truism) でしかなく、因果関係は明らかではない。 M の変化が、 V や T の変化なしに、 P だけの変化をもた

26) Hamilton (1929) あるいは Keynes (1930), Vol. 2, pp. 157-158.

27) 川北 (1983), p. 7. またウォーラステインも「1960 年までにはハミルトンの理論は実証的・理論的の両面から厳しい批判にさらされた」と述べている。Wallerstein (1974), p. 71.

表 3: イギリスの通貨铸造高： 1558～1714年 (£000)

	金貨	銀貨
エリザベス1世時代 (1558-1602)	18	105
ジェイムズ1世時代 (1603-1624)	167	80
チャールズ1世時代 (1625-1648)	143	316
共和国期 (1649-1659)	7	35
以上 1558-1659年平均	86	172
後期スチュアート朝期 (1660-1714)	156	84

データ出所：川北 (1983), p. 10.

らすというのはこの式からは保証されておらず、単にそう仮定しただけであると、彼女は批判している。²⁸⁾そして M の上昇ほどには当時の P が上昇していないことを挙げ、 V が減少したか、 T が上昇した可能性を指摘している。²⁹⁾ただし、残念ながらこれらの変数の具体的なデータが提示されている訳ではないので、この批判がどの程度妥当するかについては根拠が薄いと言わざるをえない。ただ、一般論としては、ヒュームが指摘しているように、 M による貨幣支出の増大がただちに P の上昇ではなく、短期的には T の上昇をもたらした可能性はあくまでも残る。結局はこの問題はすぐれて実証的な問題なのである。

まずハンマーシュトレームは16世紀前半のスウェーデンではまだ金銀の流入がほとんどなかったのに、価格が上昇を始めた事実を指摘している。³⁰⁾表2を見ると、確かに1510年代から物価上昇は始まっているのである。このことは貨幣的要因ではなく、実物的な要因の変化があったことを示唆している。16世紀前半のイギリスに関してはブレナーがスペインからの金銀の流入がさして起きなかったのではないかと類推している。もし金銀が大量にイギリス国内に流入したなら、それらの市場価格が下落したはずである。ところがそれは起きなかった。16世紀前半～中葉のイギリスで造幣局への貴金属の持ち込みが増えたことはあったが、それは貨幣品位の引き下げ (debasement) があったため、人々が古いコインを名目価値の高い新しいコインに変換するために造幣局に持

28) Hammarström (1957), pp. 121-123.

29) *Ibid.*, p. 126.30) *Ibid.*, p. 152.

ち込んだものと考えられる。³¹⁾川北は造幣局の通貨製造高の推移をまとめている(表 3)。この表によると 16 世紀後半よりも 17 世紀前半、とくにチャールズ 1 世時代に貨幣製造が盛んであり、エリザベス 1 世時代の年平均の 4 倍近い製造高になっている。もし新しい貨幣の一定割合が通貨量の増加となるのであれば、貨幣数量説的には 17 世紀にも価格革命が継続していた筈であるが、それは事実と反するのである。³²⁾イタリアに関してインフレの進行した 1552 年から 1560 年(年率 5.2%)の間は、まだスペインからイタリアへの貴金属の流入は始まっていないとされる。³³⁾イタリアにおいても価格の上昇と貨幣量の増加のタイミングが必ずしも一致していないのである。以上のように多くの国でインフレの開始期と貨幣量の増加時期とがずれていることが指摘されており、貨幣量以外の要因も働いていたことが予想されるのである。

さて、16 世紀の価格に関して、ハンマーシュトレームをはじめ、多くの経済史家が気づいた特徴は農産物価格が相対的に高くなったことである。ストックホルム地域での価格に関してすでに指摘したように、工業品に比して農産物価格の方がより大きく上昇している(表 2)。またイギリス南部、フランス、アルザスについて価格・賃金データを推計したフェルプスブラウンとホプキンズによると、これらの地方でも 16 世紀において食料品価格が賃金や工業品価格に比べて大きく上昇した。³⁴⁾彼らは同様の推計をミュンスター、アウグスブルク、ウィーン、バレンシアについても行い、やはり非常に似た結果を報告している。³⁵⁾そして食料品で測った賃金は大きく下落したものの、工業品で測った賃金はそれほど下落していないことに注目する。彼らの推計した賃金は建築業

31) Brenner (1961), pp. 228-229.

32) 川北 (1983), p. 10. なお、さきに 1603 年頃の貨幣量が 350 万ポンドと推定されると書いたが (211 ページ)、エリザベス 1 世時代の金貨銀貨を合わせた年平均製造高 12.3 万ポンドに在位年数 45 年をかけると 553.5 万ポンドにも上る。相当の貨幣が失われていることになるが、おそらく貿易の支払で大半が国外に流出したものと想像される。

33) このことはチポラが報告しているのだが、原論文がフランス語のため、ここでは Hammarström (1957), p. 128 による。スペインからイタリアへの銀の大量流入が 1570 年代に始まることについては、ブローデル (1992), pp. 226ff. 参照。

34) Phelps Brown and Hopkins (1957).

35) Phelps Brown and Hopkins (1959).

の労働者であるので彼らは都市の居住者である。アウスウェイトによれば、16世紀にヨーロッパ各国で人口増加が見られたとする研究は非常に多い。³⁶⁾ヨーロッパでは14世紀中葉の黒死病で人口の約3分の1が失われたとされ、その後も人口の停滞が続いていたため、耕作されない農地が発生していたものと推測される。したがって16世紀に入ってから人口増加も当初はそのような未利用農地の再利用で吸収されたであろうが、それ以上の人口増加は農業では吸収しきれず、耕作地を持たない人々が都市へと移住していったのであろう。この増加した都市人口に農業生産が追いつかなかったため、食料品の相対価格が上がったものと考えられるのである。

以上のように16世紀の価格上昇は新大陸からの金銀の流入も勿論、関係したであろうが、実物的な要因も存在したのであって、単純な「価格革命」論は大きく後退したと言える。ただし、アウスウェイトも警告しているように、人口増加だけにすべての原因を求めることもできないだろう。³⁷⁾

5 結論

本稿ではハミルトンやケインズの著作から定説とされてきた16世紀ヨーロッパにおける「価格革命」論の再検証を試みた。スペインの「新世界」植民地からの大量の金銀の流入が価格革命の原因であるとする説は貨幣数量説的に非常に明解で分かりやすい。しかし、1950年代以降、この定説に対する数多くの批判が経済史家により提起されている。まず第一に金銀の流入時期と価格上昇の開始期が必ずしも一致していないことが指摘される。多くのヨーロッパ諸国では16世紀に入って農産物価格が上昇し始めたのであるが、南米からの金銀の大量流入は16世紀後半からなのである。またスペインに限って言うと17世紀に入っても金銀の流入は続いていたのに、価格は17世紀に入って安定化している。結局のところ、貴金属の流入時期と価格上昇期が合致しないのは、貨幣以外の要因が働いていたことを示唆している。

36) Outhwaite (1982), pp. 41-43.

37) *Ibid.*, p. 44.

その点については当時の人口が増加していたことに原因を求める研究が数多く見出される。人口増加という要因が「価格革命」論批判の第二の論点である。貨幣数量説では平均価格水準に関する説明しかできないが、16 世紀ヨーロッパではほとんどの国で食料品価格が工業品価格に比べてより大きく上昇したという相対価格の変化が観察される。これは実物的な変化であり、貨幣数量説だけで説明できるものではない。15 世紀終わりから増加し始めた人口は当初は有休地の耕作に向かったであろうが、いずれ農地が不足し、人口が農村から都市へと移動したであろう。都市の人口増加に比して農業生産が追いつかなかったため、食料品の相対価格が上昇したと考えられるのである。

以上の批判は、しかし、貨幣の役割を否定するものでは決してない。貨幣量の増大が価格上昇に関与したことは疑いを容れないだろうが、貨幣だけで 16 世紀の価格上昇を説明することができないことを明らかにするものであった。さらに相対価格の変化については実物的な要因が働いたことを意味しており、それを貨幣量だけで説明することは困難である。本稿の結論として、16 世紀の「価格革命」は貨幣量の増大とともに、人口増加という実物的要因も大きく働いたのであって、貨幣だけに原因を求めることはできない、ということになる。

さて、ごく最近の研究によれば、16 世紀初頭の価格上昇の開始は中欧における銀生産が飛躍的に伸びたことにより説明されるようである。³⁸⁾15 世紀の貨幣不足から、技術革新の誘因が生まれ、製錬技術や採鉱技術に革新が起こり、ドイツ南部やスロバキア・ハンガリー・チロル地方の銀鉱の生産量が 15 世紀後半から大きく伸長したことが報告されている。たとえばこれらの地域の鉱山からの銀生産量は、1471-75 年の期間で年平均 13 トンだったものが、1501-05 年では 31 トン、1511-15 年は 34 トン、1521-25 年は 40 トンと、16 世紀に入って著増している。³⁹⁾中欧における銀生産の増加が 16 世紀前半の価格上昇を説明できる可能性も出てきたのである。やはり貨幣数量説が正しかつ

38) Munro (2003).

39) *Ibid.*, Table 1.3, p. 8.

た、ということであろうか。「価格革命」の歴史的検証はまだまだ続くものと思われる。

参考文献

- Braudel, F.P. and F. Spooner (1967) "Prices in Europe from 1450 to 1750." In E.F. Rich and C.H. Wilson. eds. *Cambridge Economic History of Europe*. Vol. IV. London and New York: Cambridge University Press. pp. 374-486.
- Brenner, Y.S. (1961) "The Inflation of Prices in Early Sixteenth Century England." *Economic History Review*. Vol. 14 (2nd ser.). No. 2. pp. 172-183.
- Cipolla, Carlo M. (1993) *Before the Industrial Revolution: European Society and Economy, 1000-1700*. London: Routledge 3rd. edition.
- Feavearyear, Albert E. (1931) *The Pound Sterling: A History of English Money*. Oxford: Clarendon Press. 2nd. ed. 1963 (原著第二版邦訳 一ノ瀬篤・河合研・中島将隆訳 『ポンド・スターリング：イギリス貨幣史』 新評論、1984年)
- Goldsmith, Raymond W. (1987) *Premodern Financial Systems: A Historical Comparative Study*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Grice-Hutchison, Marjorie (1978) *Early Economic Thought in Spain 1177-1740*. London: George Allen & Unwin.
- Hamilton, Earl J. (1928) "American Treasure and Andalusian Prices, 1503-1660: A Study in the Spanish Price Revolution." *Journal of Economic and Business History*. Vol. 1. No. 1. pp. 1-35.
- Hamilton, E.J. (1929) "American Treasure and the Rise of Capitalism." *Economica*. Vol. 9. No. 27. pp. 249-266.
- Hamilton, Earl J. (1934) *American Treasure and the Price Revolution in Spain, 1501-1650*. Harvard Economic Studies, Vol. 43, 1934. Repr. New York: Octagon Books, 1977.
- Hammarström, D.C. (1957) "The 'Price Revolution' of the Sixteenth Century: Some Swedish Evidence." *The Scandinavian Economic History Review*. Vol. 5. No. 1&2. pp. 118-154.

- Keynes, John M. (1930) *A Treatise on Money*. London: Macmillan. (小泉明・長沢惟恭訳『貨幣の純粹理論』及び『貨幣の応用理論』東洋経済新報社、1979～80年。『ケインズ全集』第5・6巻)。
- Munro, John H. (2003) “The Monetary Origins of the ‘Price Revolution’: South German Silver Mining, Merchant Banking, and Venetian Commerce, 1470-1540.” In Dennis O. Flynn, A. Giráldez, and R. von Glahn. eds. *Global Connections and Monetary History, 1470-1800*. Alershot, Hants: Ashgate. pp. 1-34.
- Outhwaite, Richard B. (1982) *Inflation in Tudor and Early Stuart England*. London: Macmillan 2nd. edition. (中野忠訳『イギリスのインフレーション: テューダー・初期ステュアート期』早稲田大学出版部 1996年)。
- Parker, Geoffrey (1998) *The Grand Strategy of Philip II*. New Haven and London: Yale University Press.
- Phelps Brown, E.H. and S.V. Hopkins (1957) “Wage-rates and Prices: Evidence for Population Pressure in the Sixteenth Century.” *Economica*. Vol. 24. No. 96. pp. 289-306.
- Phelps Brown, E.H. and S.V. Hopkins (1959) “Builders’ Wage-rates, Prices and Population: Some Further Evidence.” *Economica*. Vol. 26. No. 101. pp. 18-38.
- Smith, Adam (1776) *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*. Ed. by E. Cannan, London: Methuen, 1904. (竹内謙二訳『国富論』東京大学出版会 1969年)。
- Ubieto, Antonio, Juan Reglá, José María Jover, and Carlos Seco (1972) *Introducción a la Historia de España*. Barcelona: Editorial Teide. 9^a ed.
- Wallerstein, Immanuel (1974) *The Modern World-System: Capitalist Agriculture and the Origins of the European World-Economy in the Sixteenth Century*. New York: Academic Press. (川北稔訳『近代世界システム—農業資本主義と「ヨーロッパ世界経済」の成立—』岩波書店(岩波現代選書) 1981年)。
- Wrigley, E.A. and R.S. Schofield (1981) *The Population History of England 1541-1871*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press.
- 川北稔 (1983) 『工業化の歴史的前提』岩波書店。
- 竹岡敬温 (1974) 『近代フランス物価史序説—価格革命の研究—』創文社。

ブローデル・フェルナン (1992) 『地中海 II：集団の運命と全体の動き 1』藤原書店。(浜名優美訳) 原著 Braudel, Fernand P. *La Méditerrané et le Monde Méditerranéen à l'Époque de Phillippe II*. Armand Colin, 2^{me} éd., 1966.